

栃木県立衛生福祉大学校

奥 山 啓 子^{*1} 谷 口 幸 江^{*2} 柏 崎 こず江^{*2}

I. 沿 革

本校は、昭和42年4月に栃木県衛生検査技師学校(修業年限2年)として栃木県庁敷地内の仮校舎で発足した。その後、栃木県衛生研究所内に移り(写真1)、昭和42年4月に栃木県臨床検査技師学校(修業年限3年)、昭和59年4月には栃木県衛生看護専門学院、栃木県歯科技術衛生学院、栃木県歯科技術専門学院、栃木県保育専門学院と合併し、定員650名と大規模な公立の専修学校である栃木県立衛生福祉大学校の臨床検査学部(他に保健看護学部、歯科技術学部、保育学部)として整備された(写真2)。

臨床検査学部は、卒業生975名を輩出し県内全域、また北海道から沖縄まで全国で活躍している。平成29年には「栃木県立衛生福祉大学校臨床検査学部創立50周年記念同窓会」が盛大に開催

され卒業生が一堂に会した。

現在、栃木県内唯一の臨床検査技師養成校として、開校当時から1学年20名、定員全学年60名の少人数制によりきめ細かな教育を行っている。

II. 本校の特徴

本校の特徴は、長い歴史と伝統、充実した講師陣、県立ならではの恵まれた学習環境、3年間で教科書・諸経費含め廉価な学費、高い国家試験合格率と就職率が挙げられる。本校では、臨床検査技師教育に際して各医療機関の方々に様々な御協力をいただき教育に当たっている。

1. 教育目標

本校は「自律、創造、実践」の教育理念を掲げ、栃木県の保健、医療、福祉の専門的な人材育成を目的としている。地域包括ケアシステムの早急な構築が求められる中、臨床検査技師についても、



写真1 創立当時の校舎



写真2 現在校舎

^{*1} 栃木県県南健康福祉センター(R3～) 栃木県立衛生福祉大学校(～R2)

^{*2} 栃木県立衛生福祉大学校 kasiwazakik2001@tochigi.pref.lg.jp

地域に目を向け、地域医療、健診の予防医学、公衆衛生行政、在宅医療等、幅広い分野で必要とされる人材の育成を目指している。

2. 教育課程

1年～3年次まで週5日、3学年で109単位3,300時間の授業を行っている。3年次には4～6月まで60日間の臨地実習を県内6～8か所の医療機関に分かれて行っている。

3. 教員の体制

本学部の教員は人事異動により配置された6名の栃木県職の臨床検査技師が、県立病院や研究・行政機関の経験を基に実習等を担当している。そのため、基礎分野は宇都宮大学等の農学部・工学部・教育学部、専門基礎・専門分野は自治医科大学、獨協医科大学、国際医療福祉大学等県内各大学及び東京医科歯科大学等からの教授・講師陣約100名の非常勤講師により質の高い講義・実習が行われている。

4. 学校行事等

栃木県知事が列席し、県内各病院長、県技師会長等を来賓に迎えて行われる入学式や卒業式(写真3)、3学部6学科による新入生歓迎会、学科対抗のスポーツ大会、地域の人々が集う学校祭等、全校生徒が集う様々な学校行事がある。

学部行事としては、ディズニーランドやDNA研究所への校外研修、県内企業 Canon や県立がんセンター・保健環境センター(衛生研究所)・鬼怒水道事務所、県内大学病院等の施設見学を各学年で行っている。また、全学年が会する自由研

究発表会や臨地実習報告会、病態解析発表会を行う他、栃木県公衆衛生学会、首都圏・関甲信支部や栃木県の医学検査学会参加、学会発表等も行っている。しかし昨年度は、新型コロナウイルス感染症流行の影響によりほとんどの学校・学部行事等が中止となったことは非常に残念であった。

5. 学生の状況

臨床検査学部の学生は総じて欠席が少なく、昨年度新入生は全員が1年間1日の欠席もない程であった。真面目な学習態度であるが、例年、学校行事ではスポーツ大会で3年連続優勝するなど文武両道である(写真4)。

また、がんのリレー・フォーライフ等のイベントにボランティアとして参加し、学内サークルや栃木県学生献血推進連盟「かけはし」でも中心となって活動している。献血推進活動を通して、骨髓バンク推進協議会からは表彰状が贈られた(写真5)。栃木県臨床検査技師会主催行事である「検査と健康展」や「新人・学生を対象とした研修会」等技師会活動にも積極的に参加している。学生達は臨床検査技師会の先輩方に学び、地域住民にふれあうことで社会性を身につけ医療人として成長している。

6. 学生支援

新卒者の臨床検査技師国家試験合格率は、過去10年間平均98.1%であり第58～67回では、8回100%を達成している。成績不振者1人に教員1人が付き合格まで支援する体制を取っている。

就職先としては3/4が病院、1/4は健診機関、



写真3 卒業式(知事を囲んで)



写真4 スポーツ大会優勝



写真5 献血ボランティアサークル

公務員職場等である。毎年1～2名が大学への3年次編入試験に合格し金沢大学、新潟大学等で学んでおり大学院にも進学している(2021卒21名中就職20名:県内大学病院8、公立病院等7、健診機関1、県外大学病院1、公立病院他3、大学編入学:1名)。進路については1学年次から個人面談により把握し卒業時まで支援している。また保護者説明会を開催し、保護者とも連携を図りながら学生支援を行っている。

III. 教育の取組

チーム医療の推進が求められる中、医療関係者間、介護や福祉の分野とも円滑に連携できるよう、本校では近年多職種連携教育に力を入れている。多職種の理解を深めるため学生間のインタビューを実施したり、看護学科、歯科衛生学科の研究発表会、保健学科の健康教育への参加等を行っている。また、看護教育で行われているベットや車椅子からの患者の移設・移乗の演習、コミュニケー



写真6 SPによる演習

ション論や在宅医療論等の講義への参加についても検討している。

学外においても、県内にある獨協医科大学(及び姫路獨協大学)の医学部、看護学部、リハビリテーション学部とのPBLによる多職種連携教育に参加させていただきチーム医療の実践方法を学んでいる(図1)。

本校ではコミュニケーションスキルの向上を目的として、平成25年度から東京SPの会に依頼し、模擬患者に対峙しての検査説明の演習を実施してきた。今後もチーム医療に参画することができる臨床検査技師を養成していく。

IV. 現在の課題

今後の課題として、本校では均質な新入生の確保、3年制教育のあり方、時代の要請に見合う臨床検査技師の養成等の課題がある。

新入生の確保については、過去において10～20倍の入試倍率の時代もあったが、現在は3倍程度であり均質な学生の確保が困難である。入学者に占める県内者の比率は約2/3であるため、入試制度改正により県内の均質な受験生を確保することが急務となっている。

現在、臨床検査技師教育養成において専門学校は22校で全体の1/4程であり、本校は全国唯一の県立の専門学校となる。本校でも大学構想は幾度となく検討されてきたが、3学部6学科の足並みが揃うことなく今日に至っている。学部では、限られた養成年限と人員、県費である予算に苦慮

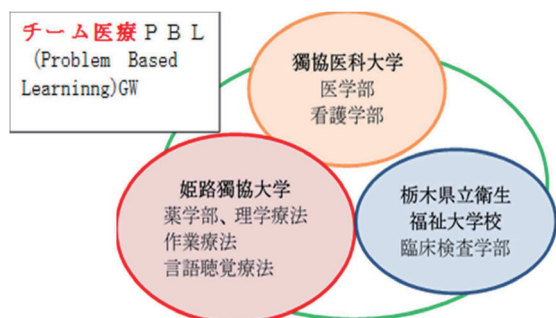


図1 PBLについて

しながら時代の要請に見合った人材育成にあたっている。

現在、カリキュラム改正作業を進めているが、臨床検査技師には患者と正面で向き合い「検査説明、検体採取、検査の実施、検査結果説明・相談」まで一連で行うことが求められている。卒業後、病棟業務、安全管理、感染対策、糖尿病療養、治験管理、在宅医療等のチーム医療が実践できるような臨床検査技師を育成するためのカリキュラムを作成することが課題である。

V. 今後の展望

昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、本校でも5月1日からSkypeによるオンライン授業を行ったが、感染対策を講じた後の6月には対面授業・実習に移行した。今年度はマイクロソフト社のTEAMSを用いたオンライン授業や

教材の電子配信を行う等、学習環境の整備を行った。

栃木県内においても医療提供体制が逼迫する中で、卒業生たちは、県内各医療機関において検体採取やPCR検査を実施し、県庁のコロナ対策本部では陣頭指揮を執り、保健所の感染症予防担当では疫学調査や相談業務を行うなど昼夜を問わず活躍している。

今後も、県政の医療課題に柔軟に対応できる臨床検査技師を養成することが県立の養成校としての役割である。また、本校の教育は日本臨床衛生検査技師会会員である臨床検査技師の職員により行っている。現在も医師のタスクシフト、タスクシェアリングの推進に向けた議論が行われているが、専門学校として、時代の要請に見合う、医療現場の期待に応えることができる“臨床”検査技師の育成に努めることが本校の使命であると考えている。